
竜騎士（ドラゴンライダー）放浪記

治田 神裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴンライダー

竜騎士放浪記

【Nコード】

N9293M

【作者名】

治田 神裕

【あらすじ】

龍の住み処に迷いこんだ一人の少年は思いもかけない申し出を受ける。

龍の眷属となった主人公は仲間とともに国を守る為奔走する。

仲間を守る為、家族を守るため、そしてなにより約束したから……

龍の力を持つ青年のバトル無双ファンタジー

エピソード（前書き）

エピソードです。どうぞ

エピソード

竜、龍、ドラゴン、呼び方は様々ではあるが不思議なことにいずれの場所にも伝わっており、知られる最強の生き物である。

彼らの起源は遡ること数千年ともなる、しかし共通するのは巨大な身体、硬い鱗、といったように竜がいかなる生き物よりも強く及ばないものであるというところである。

それは異世界であるこの世界でも例外ではなく、いや、実際存在する竜は最強の生き物であり、及ぶものはなし、抗えしは神々のみとされている。

私は竜こそ、神と並んで存在する中でも最強であると断言する。

彼らの生態を知る者は存在しないが、わかっていることは、彼らを怒らせてはならないという事である。

地球人、迷い人 コーサカ・ミツキの手記より

（なにもものだ……）

不粹な侵入者に対して龍は問い掛けた。

それにたいして侵入者、小さな子供は返事をせずただただ近寄って来た。

（食い殺されたいか！）

殺気を籠めたその声を聞いてようやく侵入者は竜の存在を認めた。

「……………誰？」

（ほう私を知らないと申すか小童、）

「……………竜？」

（そうだ、知っているではないか、）

「……………何？」

（何ではない！貴様は我が住み処に立ち入っておる、即刻立ち去れ

！
）

「……嫌だ」

（なっ！？）

まさかはっきりと拒否してくると思わなかったのだろう、龍は目を白黒させた。

「……邪魔なら殺せ」

そう言って少年は懷からナイフを取り出した。

それを呆氣にとられて眺めていた竜だが、始め怒ろうとしていたことを忘れ、笑い始めた。

（おもしろい！面白いぞ小僧！我にそこまで刃向かってきたのは貴様が初めてだ）

「……お前のことはどうでもいい、俺を殺すのか、殺さないのか」

言葉少なだった少年はそんな龍を見ても態度を変えなかった。

（ふむ……）

そこで龍は初めて少年を注視してみた。

年の頃はまだ三歳ほどであろう、先程から流暢に話していたのが信じられないくらいだ。

黒眼黒髪というこの世界では珍しい容姿をしている。

三歳とは思えない程鍛えられた身体をしていた。

（……小僧、貴様親はどうした）

故に、龍は戯れのつもりで話しかけた。

「……………死んだ」

（ほう、病か？）

「違う、殺された」

身内の死を淡々と語る少年、龍はますます少年に興味を持った。

（ほう、ならば何故このような場所におるのだ？人里はこの辺りにはないぞ）

「……………人が居なければどこでもいい」

（そうか……む？）

幼い少年の話しを戯れに聞いていた龍だが、少年から力を感じ、顔をしかめた。

（貴様……その魔力は何だ？）

「……………魔力？ああ、これのことか」

そう言って少年は首に掛けてあったペンダントを外してみせた

（こ、これは！？）

そのペンダントの先に着いている石を見て龍は態度を一変させた。

（そうか……貴様がそうか……）

「これがどうしたというんだ？」

少年はいきなり黙った龍に向かって苛立ちを現にした。

（小僧、貴様名は何という）

しかしそれには答えずに龍は少年の名を尋ねた。

「……ライア」

少年はそう言うのと黙ってしまった。

（そうか……ではライアよ）

それを聞くと龍は驚くべき事を口にした。

（我が息子となれっ！）

それに少年が何と答えたかは……龍と少年だけがしっていた。

エピローグ（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

設定公開（前書き）

設定です

設定公開

龍、竜と発音は同じでもランクがちがう。

最上位 神龍

上位 古龍

中位 龍

下位 竜

の順番である。

神龍は二体しかおらず世界の創世から存在しているとされる。

古龍は数万年を生きた固体を指し、数体しかない。

龍は数十体存在するが最低千年生きた個体である

竜に至ってはかなり存在するが竜はさらに、飛竜、地竜、岩竜、などに別れる。

ちなみに龍となるのは真竜だけであり、他の竜は数十、百年しか生きない。

龍の生態について、

執筆者 コーサカ・ミツキ

第一章 竜の掟、青年旅立つ

ここは大陸西部に存在するローマン王国。それなりの歴史を有する大陸ではまさしく真ん中、つまり平均的な国であった。

軍事力は大国には及ばず、国土もそれなり、気候は四季のはっきりした風土であり。

大国と少国を足して二で割ったような国であった。

その首都オパーリンに一人の男がいた。

「おおっ、美味しいなこれ、なあルーも食えよ」

「俺はいい、……………それよりライア、親父が怒ってたぞ、いいのか？」

「ああ、いい、いい、ほっとけ」

「……………一応、親父は古龍何だが……………」

「それが？」

「……………いや、何でもない」

「だろ？ おっ！ これも美味しいな、おばちゃん、これもう一つ」

あいよー、と言う店のおばちゃんの声聞きながらルー、と呼ばれた男は身体を窮屈そうに動かした。

「なあ、ライア　いつまでここにいる気だ？」

「んー、そうだな、適当に店見てまわったら帰るか」

「そうか、なら俺は門の外で待っているぞ」

そう言ってルーはその場を去った。

「やれやれ、やっぱりあいつには合わないか……」

ルーが去るのを見送るとそう言って青年、ライアは再び買い食いに没頭した。

「いやー、大漁、大漁」

「おまえ……買い過ぎだろう、どうする気だそれ？」

「ん？もちろん、食べるぜ、んじゃ、よろしくー」

「……………」

諦めたかのような溜め息をつく、ルーは屈みこんだ、と思った瞬間、そこには体長五メートル程の竜が鎮座していた。

「おーし、帰るぞっと、その前にカリヤ湖に行って水浴びしようぜ」

「……了解だ」

そう言って竜は青年、ライアを乗せて飛び去った。

「うーむ、やはりここはいつ来てもいいなあ…」

青年ライアがそう声を漏らすと、隣にいた竜が同意の声をあげた。

「まったく、もってその通り、どこかの馬鹿のせいで背中がベタベタして仕方がない早く綺麗にせねばならんからな」

「……それはまさか俺への嫌み？」

「安心しろ、まさかではないまごうかたなき嫌みだ」

「どこに安心できる要素があるんだ？」

「……………」

平気な顔をしているライアを見る限り、ルーの嫌みは通じていない

「まっ、いいか、おーい、泳ごうぜ」

そういうとライアはあっというまに潜ってしまった。

ルー、と呼ばれた竜は溜め息をつくと後を追って湖に飛び込んだ。

「いやー、気持ちいいな、さっぱりしたぜ」

30分後、竜と共に泳いでいたというのに、息すら切らしていないライアは湖のほとりでルー、の帰りを待っていた。

「あいつも泳ぐのは好きだからな、こりやしばらく戻らねえか……」

そういつてライアは街で買った食べ物の残りを食べていたが……

「ん？」

生き物の気配を感じて警戒したように腰をあげた。

「……こりゃ、人間か？ちっ！しゃあねえ、」

そう言うと、ライアは突然首元のペンダントを握りしめるとルーの名前を呼んだ

「ルー！人だ！戻ってこい」

（……わかった）

と、次の瞬間湖から竜が飛び出してくるとライアを乗せて飛び去った。

「ふー、あぶねえ、あぶねえ」

「ぎりぎりだったな」

湖を脱出した青年、ライアと竜のルーは中央山脈、ドラケンスピークに向かって飛んでいた。

「あの湖も行けなくなるところだったな」

「ああ、しかし今回は最後になるかもしれんぞ」

「どういうことだ？」

「あの湖、元々人が来るような場所じゃないからな」

「ということとは？」

「多分、人間が開発に乗り出したんだろう」

「……………またか、これでいくつになる？」

「さあな……………だが龍が親父達が黙っているとも思えんがな……………」

そう言って二人は黙って飛んだ。

ドラケンスビーク、通称牙龍山脈

人間がしる数少ない、龍の住み処として知られ大陸を真つ二つに割る、巨大山脈である。

高さは低い所で四千メートルに及び、高い所は一万メートルをゆうに越える、また、激しい風が吹いているため、鳥やペガサス、グリフォンといった空を飛ぶ生き物すら近づくことができず、出入りできるのは龍だけであった。

そんな風の吹く中を青年ライアはルーの背中に乗って平然としていた。

竜、ルーは上昇を止めると高度八千メートルほどにある洞窟に飛び込んだ

「ふいー、やれやれただいまっ」と

降りるなり身体をほぐしていたライアだったが、突然響いた怒声を聞くと頭を抱えた。

「あちゃー、忘れてたぜ親父殿を待たせてたっけか……」

「早く行け、……かなりきてるぞこれは……」

「聞ってるよ、一日で済むかなあ……」

「さあな、早く行け」

「薄情者、覚えてやがれ」

ライアは奥に向かった。

しばらく奥に進むと急に視界が開けた。

そこには雄大な自然が広がっていた。

竜の楽園、ドラゴニクス

広さは国が五つは入るほどである。

草原には獣が群れ、穏やかな風が吹いており、周りの天候が嘘のようであった。

（ライア！貴様！どこに行っておった！）

とそこに怒声が響いた。

それを聞くとライアは声の主の元に向かった。

「そう怒鳴るな親父殿、下界だよ、下界」

（またか……まあ懐かしむ気持ちはわかるが自重しろ）

「やなこった、とそれよりも何の用だ？」

（……昔はあんなに大人しかったというのに……何故こうなったか）

「さあね、それより答えろよ」

（うむ、実は神龍様からのお話でな、貴様を旅に出すようにとのことだ）

「は？」

（聞こえなかったか？旅だ）

「何故？」

（うむ、近頃下界はきな臭くなっておるのを見て神龍様がな、少し

手を降さねばなるまいとおっしゃったのだがな、誰も動きたがらんなのでな、貴様に話が来た訳だ」

「何故俺？」

（自然を荒らす人間共に鉄槌を降してやろうと思ったのだが、奴らの匂いは好かんのでな貴様なら平気であろう？）

「それで何故旅になるんだ、」

（いや、旅と言っては語弊があるか……キルリアン帝国とやらを知っておるか？）

「まあ……知ってるぜ、別名科学国家、だろ最近気球やグリフォンといった飛ぶ者なら何でも集めている果てには下竜も集めてるらしいぜ」

（うむ……そこが大胆にも我らを襲おうとしているらしくてな）

「あー、いるよな阿呆な王はどこにでも、もう忘れたのかねえ」

（まあ、前に我らに逆らったのは千年前だ、忘れたのであろう）

「リドニア帝国ね」

ライアが言うリドニア帝国とは千年前に大陸の半分近くを支配した帝国であり魔法文明の絶頂期でもあった。

魔法の至宝とされた統合魔術ウィザードリイも存在し、真竜以外の竜族、火竜や地竜をも使役し最強とも言える軍隊を有しており、現在においても過

去に置いても最強であった国であり千年近く栄えたが、思い上がった王が龍討伐を宣言、陸兵十万、魔導兵五万、竜騎兵一万、幻獣兵（空兵）二万、工兵二万

計二十万もの兵士がドラケンスビークに押し寄せ、ドラゴニクスに侵入、したがそれに怒り狂った龍達が反撃し、兵士すべてが灰にされ、龍達はさらにリドニア帝国を攻撃、国土の三分の二が灰となり人間は滅びかけたが神龍の命令により龍達は引き上げ、人は生き残った。

そして今、千年の時を経て人間はまた、幻想を抱いたようだった。

（そこで貴様はリディア王国を手伝ってこい）

「はあ？ 何故？」

（かの国はキルリアン帝国の龍討伐を批判しておる勢力だ、そこで貴様が助けてやれ）

「いや、別に親父達が出ればいいじゃん、」

（だからこれは神龍様のご命令だと言っただろうが！）

「聞いてなかった」

（とにかくルーと何人か連れてでもいい、おそらく近日中に戦争が始まるであらうからリディア有利で終わるよう仕向ける、わかったな
！）

「……了解」

(うむ、では行け！)

「了解だ親父殿」

今までのおちゃらけた様子とは打って変わって真面目な様子でライアは返事をした。

「戦争……またかキルリアン帝国！」

ライアは静かな怒りを見せると旅立つべく自らの部屋に向かった。

「おい、ルーク！ロランとリーフを呼んでこい」

「何だ、戦争にでも行くのか？」

「そのまさかだ、あつ、あとレイも呼んでこい」

「………わかった、どうやら真面目な話のようだな」

そう言うところ、先程までルーと呼ばれていた竜はその場を後にした。

「さて………」

それを確認するとライアは旅の準備を始めた。

といってもたいしたものではない金貨や銀貨などの路銀とマントなどの着替え、それにナイフ、そして異様な装飾のされた剣を持つとライアは部屋、を出た。

先程の洞窟に行くと呼出した面々が揃っていた。

「ライア、なんの用だ」

そう言って話し掛けてきたのはこの中で最年長のリーフ二年程前に龍となっており、竜である、ルークやロラン、レイより上である。

「あー、まあ頭に事情は送るから見てくれ」

そう言って頭からイメージを三頭の頭に流す

「理解出来たか？」

ライアが尋ねると三頭とも頷いた。

「成る程……古龍達が集まって何をしているかと思えばそういう事か」

「そういうこと」

「で？我らにどうしろというのだ？」

リーフが尋ねてくる。

「んー、とりあえずリディア王国に向かうからついて来てくれないかってこと、いきなり俺が行ったて納得しないだろうからな」

「確かにお前が行ったところで相手にしないだろうな」

「そういうこと、で？ルーとレイフォンは来てくれるの？」

「断っても連れていくだろう」

ルークが溜め息まじりに答え。

「おもしろそうね」

レイが承諾した。

「おしつ、じゃあ決まりだ、行くぞ」

「「「おうっ！（ええ）」「」」

ライアの声を含図に三頭と一人は飛び出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9293m/>

竜騎士（ドラゴンライダー）放浪記

2010年10月10日00時23分発行